

CAPS Newsletter

The Center for Asian and Pacific Studies, Seikei University

No.91

July, 2006

25年前の情熱を糧として

所長 鈴木 健二

それは、まさに温故知新でした。CAPS 25周年史を書くにあたり、草創期の活動を調べようと、倉庫から古い書類を引っ張り出しました。当時は、まだパソコンが普及していなかったのでしょう。手書きの多い古びた書類は、熱い思いでにじんできました。「どこにも負けない研究機関をつくるぞ!」との意気込みが一枚一枚の用紙からほとぼしり、私は思わず涙をこぼしそうになりました。

当時の空気を知る関係者は、もう数えるほどになりました。しかし記録は雄弁です。CAPS 立上げに向けて、先輩たちはおそらく毎日毎日、夜遅くまで口角泡を飛ばして議論したに違いありません。私たちがいま悩んでいることも、四半世紀前にしっかりと討議を重ねていました。名称の問題、研究領域、学内の位置づけ、組織体制……。なかでもCAPSの「あるべき姿」の探求は、私たちが目下、考えあぐんでいたことなので、目から鱗の落ちる思いで読みました。

研究領域を地域領域とするか課題領域とするかは当時もいろいろ意見が出て、結局、それを超越する形で、研究主題を設定しようということになりました。学際研究で、参加者全員が関心を持ち、一般的で具体性のあるテーマはないか。延々と続いた議論の結果が、「近代化」でした。廣部和也・



意見が百出した『CAPSを考える集い』

法務研究科長や加藤節・前専務理事も、5月に開かれた「CAPSを考える集い」で同じように指摘していました。

私たちも、広範囲かつ中長期的視点にたったCAPSの中心課題を模索しています。これから向こう10年を考えると、その核としては「近代化」はいささか古色蒼然としているかもしれません。いまはやりの「グローバリゼーション」も、やや手垢に染まった感じがします。なにかこれに代わるものはないか、私たちは寝食を忘れて侃々諤々の議論をしなければなりません。そうしなければ25年前の先輩にもうしわけない。

紙の変色した古い記録は、私たちをもう一度奮い立たせてくれました。もっと悩んで、苦しんで、CAPSの「あるべき姿」を探し続けなければならないと。

どうぞ、皆様のお知恵も、お貸しください。

<「25周年 CAPS を考える集い」のパネラーから>

個人「周辺」テーマに共同研究の芽

法学部教授 富田 武

CAPS改革論の中で共同研究のポテンシャルが低下していることがつとに指摘されてきました。それは私が所長をしているとき(1999 - 2002年)にも、プロジェクト応募の少なさ、プロジェクト成果物(論文集)発行の著しい遅れ等で実感していたところです。しかし、先日の「25周年 CAPS を考える集い」で話すことを準備しているうちに、所長経験者としてではなく、一人の研究者として自分はどうかかわってきたか、見直そうと思いました。

私は1988 - 89年に所員を経験した後、90 - 93年に「難民」プロジェクト、93 - 96年に「民族と国家」プロジェクトに参加し、94 - 97年に「北東アジア」プロジェクトの共同責任者をつとめ、2001年6月1 - 2日「21世紀のアジアと女性」フォーラムを所長として主催し、その延長として02 - 05年に「アジアと女性」プロジェクトの責任者をつとめました。これが自分の研究とどう関連していたかですが、まず自分の「本体研究」、即ち「基本テーマ」であるスターリン期ソ連政治外交史や「発展」テーマである日ソ関係史、コミンテルン史は個人ベースで行い、時に同業者と組んで科研費での共同研究を行っています。たしかにソ連の半分はアジアですが、半分はヨーロッパであり、歴史研究のためもあるが CAPS 共同研究には馴染まないからです。

しかし、誰でもそうであるように、研究者には「周辺」テーマがあります(若いうちは少ないでしょう)。私の場合ロシア革命、ソ連史全体、そして崩壊過程がそれに当たり、「難民」「民族と国家」プロジェクトにはペレストロイカ期に発生した民

族紛争と難民に関する問題意識と知見を持って参加しました。また、比較体制移行論、権威主義体制の民主化論も「周辺」テーマですから、「北東アジア」プロジェクトには前半、即ち、ロシアと中国の市場経済化の総合的分析にも、後半、即ち、極東ロシアの政治・経済・軍事・外交的分析にも参加したのです。この「周辺」テーマと重なるように、大学院生及び学部演習指導上の「教育」テーマがあります。大学院生の選ぶ研究対象は指導教授の「本体研究」の「周辺」にあり、私は自分の「周辺」テーマから学部演習主題を選ぶから、そうなるわけです(北東アジア、「東アジア共同体」)。

このように、「本体研究」はCAPS共同研究から縁遠くても「周辺」テーマで他の教員と接点ができることになります。さらに私の場合「周辺」テーマの外側に「市民的関心」とも言うべきものがあり、ジェンダー関連のフォーラム及びプロジェクトを行ったのもこの関心に基づいています。こうしたプロジェクト参加で得た知見、現地視察の経験等は、「本体研究」には直接貢献しなくても、「周辺」テーマ研究を豊かにし、大学院生・学部生教育に生かすことができます。

全学の教員の皆さんには是非とも自分の研究を客観視し、「周辺」テーマを自覚的に浮かび上げさせ、共同研究の提示に応ずる用意をしてほしいと思います。CAPSは、ニューズレター等を用い、上記「研究の諸層」掘り起こしを促し、「周辺」テーマのリストアップに努め、共同研究をプロモートするよう要望します。

(これは5月25日当日に配布した報告レジュメの一部を文章化したものです。)

＜アジア太平洋研究センターの将来に寄せて＞

大学の共通研究課題について

経済学部教授 幸村 千佳良

アジア太平洋研究センター(CAPS)はこれまでアジア太平洋に関わる幅広いテーマを扱ってきていますが、日本の大学教育の問題に関する研究テーマは取り扱われたことがありません。今、センターの存続の意義が問われていますが、本稿では、一つの問題提起として、学部横断的に大学のあり方を検討する共通研究課題の必要性について検討します。

現在の日本の大学が置かれている立場は、周知の通り、いわゆる少子化の影響による学齢対象者そのものの減少により、経営基盤が直接冒されています。以下ではまずこの背景を確認します。少子化といわゆる団塊の世代、団塊の世代ジュニアの退場によって2100年の日本の人口は6413.7万人(国立社会保障・人口問題研究所の中位推計)と2006年1月の人口1億2768.5万人から半減することが予測されています。いわゆる団塊の世代(1947～49年生まれ)のピーク1949年の出生数(人)は約269.7万人、団塊ジュニアのピーク1973年の出生数は209.2万人で、1949年から既に22.4%減です。団塊ジュニアのジュニアには顕著なピークが無く、25年後の1998年の出生率は120.3万人で1973年から42.5%減です。因みに、2003年の出生数は約112.4万人で、1998年から6.6%減です。2006年に大学に入学する1988年生まれは131.4万人でしたが、それ以降も大学入学の適齢人口は減少し続けることが確実です。この背景は周知の通り、女性の晩婚化と少子化のせいで、合計特殊出生率(1人の女子が一生の間に産む子ども数)は1949年4.32人、1973年2.14人、2003年1.29人、2005年1.25人と低下しており、今では人口の維持に必要とされる2.07人を大幅に下回っています。女性の高学歴化、生涯に亘る就業傾向を見ると、合計特

殊出生率の大幅な上昇は見込めないものと予想されます。

このような人口の長期的な変動は国レベルでの高等教育のあり方を再検討させざるを得ないものですが、当事者としての大学は受験生の減少、そこから生じる学生の質の低下などに対して、より切実な対応を迫られているものといえます。成蹊大学もこれまで各学部のカリキュラムの改革により、時代趨勢に合った教育内容を提供する体制を整えてきたといえますが、今後の時代趨勢を考えると、大学の合併、学部再編、学科再編など、より抜本的な対応が不可避となることが予想されます。いわば、教育のあり方、学部・学科のあり方などを長期的視点から検討・研究する時期にきていると考えられます。実際の改編の嵐が生じる前に、若い世代の研究者が学部横断的に自由な議論をして、今後の大学教育のあり方について独自の研究成果をまとめていく必要があるものと考えられます。アジア太平洋研究センターの本来の研究に加えて、長期的な成蹊大学のあり方の資料となるような教育研究テーマを、いわば大学の共通研究課題として採り上げる必要性があると考えられます。

参考文献

- 中央教育審議会『我が国の高等教育の将来像(答申)』平成17年1月28日
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013101/013.htm
 内閣府編『少子化社会白書 平成16年版』付録4 出生数、合成特殊出生率の推移
<http://www8.cao.go.jp/shoushi/whitepaper/w-2004/html-h/html/g3340000.html>

＜拡大研究会報告記事＞

センター主催拡大研究会

文学部教授 三浦 國泰

演題：記憶の技術者としての都市遊歩者の東京発見 - 都市空間とフラヌールとの関係について
 講師：エヴリン・シュルツ教授（ミュンヘン大学
 日本文化研究所）

アジア太平洋研究センター招聘研究員として、2006年3月17日から5月17日までの2ヶ月間、ミュンヘン大学エヴリン・シュルツ教授が成蹊大学に滞在した。シュルツ先生の研究は、「都市と文学」を中心テーマとして、永井荷風、幸田露伴などの文学作品にみられる都市の諸相や都市の景観、そしてそこに暮らす人々の日常生活が取り上げられている。特に先生の関心は、江戸末期から明治初期、そしてその後、急速に近代化する東京とそこに残された古い日本の伝統的町並みとの関係に向けられている。

今回の講演では、われわれ日本人の視点から見れば、見慣れた都市の風景がドイツ人のシュルツ先生の鋭い視点によって、あらためて浮き彫りにされ、そこからわれわれが見落としているさまざまな問題が提起され、あらたなインスピレーションが喚起されることになった。そうしたシュルツ先生の問題意識をささえているキーワードが「記憶」や「都市遊歩者」としての「フラヌール」である。この聞き慣れない「フラヌール」という言葉は、ドイツの文学者ベンヤミンが『パサージュ論』で定着させた概念であるが、それはパリの遊歩者ベンヤミンが19世紀末から20世紀初頭にかけて、近代的な都市改造にともなって喪失してゆく「失われた時」を想起する重要なモチーフとなっている。「記憶」の問題はブルーストばかりでなく、特に異邦人リルケの『マルテの手記』にも通底する問題意識であり、シュルツ先生の研究はそうしたヨーロッパの文学的伝統を確実に踏まえながら、視点を近代都市東京に移している。

特に東京が大きく変貌する時期として、明治維新はもちろんのこと、第二次大戦後の日本の平均化する町並み、東京オリンピック期のビルラッシュ、さらに最近の例としてはバブル経済期や東京のウオーター・フロント計画などが取り上げら



れ、「陸の東京」ばかりでなく、「水の東京」という視点をわれわれに想起させることになった。また今なお戦後の顔が残る例として、吉祥寺のハーモニカ横町などにも言及され、失われゆく「路地文化」の大切さが強調されていた。シュルツ先生は、そもそも「散策」が文学作品に登場する例として、ルソーの『孤独な散歩者の夢想』、シラーの『エレギー』、そしてボードレルの『パリの憂愁』などに言及しながらも、みずから東京の「フラヌール」として、東京散策を満喫している様子が印象深く伝わってきた。そこに永井荷風の『日和下駄』を研究するシュルツ先生の「都市遊歩者」の姿がダブルイメージとして重なったのは、私一人の印象ではないと思われる。

ところで今回の講演会では、先生はご自身で撮影した東京の町並みのスライドを使用しながら専門分野以外の聴衆にも分かりやすく、流暢な日本語で説明され、そうした和やかな雰囲気は、その後の活発な質疑応答にも見られた通りである。参加者は、文学部のほか、経済学部、工学部の教員、そして院生や学生、ボン大学からの協定留学生、そして武蔵野市民聴講生なども交え、当初予定していた座席も足りなくなるという大盛況であった。講演会後のシュルツ先生を囲んでの「饗宴」においても、「居酒屋文化論」に花が咲き、大いに盛り上がったことには、特に報告の必要はないと思われる。

最後に、シュルツ先生、そして参加者の皆さんに、ホスト教授として心からお礼の言葉を申し添えたいと思います。

<センター交流招聘>

Walking through Tokyo - Strategies of making the global megalopolis home

Full Professor Ludwig Maximilians University of Munich Evelyn Schulz

Since the nineteenth century most modern cities have been transformed by the industrial revolution and a previously unknown growth of population. Additionally, due to their importance in the building of a nation, capital cities were an especial focus of ambitious modernisation and a testing ground for new patterns of city planning. Modernisation, and later on “globalisation” have not only left its mark on European capitals such as London, Paris and Berlin but also on non-European ones, for instance Tokyo. All these cities have become centres of manufacturing, exchange and consumption, of communication, cultural production and national representation.

Accordingly, all these metropolises have experienced tremendous changes and transformations of their urban fabric, population, culture, and everyday life. In particular the history of Tokyo can be described as an ongoing cycle of destruction and rebuilding. The most dramatic events are the modernization of Tokyo in the course of the Meiji Restoration, the Great Kantô Earthquake of 1923 and Tokyo’s rebuilding, Tokyo’s destruction during the war years of 1944 and 1945, and its rebuilding and forced industrialization in the post-war period, the modernization projects in the run-up to the Olympic games of 1964, and Tokyo’s formation as global city and the building boom of the 1980s. Today a total of 33 million people make up the living area of the Tokyo Megalopolis Region.

In short, in present day Tokyo spaces and buildings of the Edo and Meiji periods have only survived by accident. As the ongoing construction of highways and skyscrapers permanently



transforms not only the skyline of the city but also the spaces of everyday life, I am in particular interested in cultural strategies and practices of both preserving the memory of Tokyo’s past as well as making Tokyo home. The transformation of Tokyo has been accompanied by enormous writing activities. A large and diverse body of texts about Tokyo has come into being. These texts include a wide range of genres such as social and economic analyses, topographical descriptions, philosophical and political treatises, reportages as well as documentary and literary texts. Most of them have so far received only scant attention in Japanese literary criticism and the Western studies associated with Japan.

However, all of them are involved in the struggle of writing down Tokyo’s history while providing various kinds of information useful for understanding the city, i.e., its transformation in terms of appearance, structure and function, and the rapidly changing realities of its everyday world. Most of them are semi- or non-fictional and therefore are not categorised as ‘literature’, as

bungaku, in other words.

In recent years, in urban discourse more and more attention is directed to the question of how the individual is perceiving and appropriating both urban spaces in general as well as the particular city where one lives. The prototype of such an individual is the figure of the walker-writer respectively *Flâneur* who leisurely strolls through the city and then writes about his experiences.

In particular, in modern Japanese literature and culture a strong interconnection between writing and walking can be observed. The so-called sanpo *bungaku* (literature of walks) is based upon written-down walks which mostly are undertaken alone. As most of the walkers know the areas they are writing about from their childhood on, traversing a city on foot is an autobiographical respectively autoethnographical activity. In this respect, the urban connoisseur is also an amateur archeologist of the recently vanished past. Not surprisingly, an elegiac nostalgic tone creeps into this genre, as personal memories intersect with what had formerly existed on a particular spot.

The object of nostalgia in these memoirs is both the autobiographical subject's past as well as the historical experience of the people of Tokyo, if not of Japan in general. In this respect, these memoirs straddle the generic conventions of autobiography and ethnography, hence they could be called "autoethnography" or "autotopography", as they are centred on an intense relationship between the built environment, personal and collective memory, and history.

In this context the writings of Nagai Kafû (1879–1959) can be seen as starting point to the emergence of the modern *Flâneur* in Japan. Kafû has been called the

chronicler of Tokyo, and he is indeed an urban writer par excellence. In particular his essay *Hiyorigeta* ("Fair-weather clogs"), published in 1914, became a model for this genre of urban literature. Further examples are publications such as *Boku no shin kyû Tôkyô chizu* (My Map of the Old and New Tokyo; 1936) by Satô Hachirô (1903–73) and *Watashi no Tôkyô chizu* (My Map of Tokyo; 1949) by Sata Ineko (1904–98), while more recent examples are *Boku no Tôkyô chizu* (My Map of Tokyo; 1985) by Yasuoka Shôtarô (b. 1920) and *Watashi no naka no Tôkyô* (The Tokyo Inside Myself; 1989) by Noguchi Fujio (1911–93). The 55 volumes anthology *Furusato bungakukan* (Tokyo: Gyosei, 1993-95) is a huge collection of related texts covering not only the literature of Tokyo, but nearly of whole Japan. In recent years, a new wave of nostalgic accounts of "Tokyo's way of life in the Shitamachi area" and in particular of photograph albums of "the Tokyo that has been lost" can be noticed.

Nostalgia conjures up an image of the past from the point of view of the present. As a result, it often reflects the present more than it does the imaginary past. Many of these publications focus on describing urban consciousness and the everyday life and culture in the small alleyways, the *roji*. The narration of the personal memories of growing up in Tokyo or making Tokyo home affirms a local identity which feels threatened by the fragmentation and commercialization of Tokyo's urban space resulting from the globalization of the Japanese economy. In this respect, such writings can be understood as an alternative way of narrating history to what has been officially sanctioned by the nation-state and its politics of transforming Tokyo from a city of waterways (as Edo was) to the capital of globalizing Japan.

本を読む

安田 敏朗著

『辞書の政治学 ことばの規範とはなにか』

文学部助教授 森 雄一



オーストラリアで在外研究を行っていたとき、ベトナムの国立国語研究所で国語辞典の編纂を行っているという若い研究者と親しく話す機会があった。彼我の国語辞書研究の現状などについて情報交換をしているうち、日本最大の国語辞典が電子化利用されていないという事実が彼をととても驚かせたことに驚いた。日本のような「ハイテク」国家最大の辞典がそのような段階にとどまっているのは信じられないというのである。

『辞書の政治学』と題されたこの書物は、日本においての、国家と国語辞典の関わりが多くの国語辞典を題材に論じられている。『広辞苑』編纂をめぐるテレビドキュメンタリー番組(『プロジェクトX』)の語り方がナショナルな要素をどのように呼び寄せているのかといったことを導入に、「文明としての辞書」と題された第一章では、「文明国である以上、その国語を網羅する辞書がなくてはならない」という国家事業としての国語辞典編纂が『言海』を中心に論じられ、「文化としての辞書」と題された第二章では、「国民文化を体現するものとしての国語辞典」というストーリーが再び『広辞苑』を題材に語られる。国家や国民文化を背負った国語辞典は権威を帯び、多数ありうる言語使用の基準を示したものとしてよりも言語使用の規範を示すものとしての国語辞典観が成立しているというのが著者である安田氏の見方である。しかしながら、このような国語辞典観は、具体的な使用者の間ではあまり定着しておらず、いかに国語辞典が身近なものではなかったかが続く第三章では論じられている。このような状況に苛立つ国家側が目指すものが「国語辞典の習慣化」で、第四章では、国語科の学習指導要領が、この点をどのように強化してきているかが語られている。

筆者(森)は、意味論を専門とする日本語学者として国語辞典の「内側」には深い関心を抱いてきたが、安田氏の論じるような「外側」から見た近代国語辞典論に触れることはあまりなく、本書によって多くを学んだ。なかでも、近世以前の「字

引」的な性格、実用的な性格が近代以降

は薄れていき、国語辞典が何か権威的なものとして君臨しており、その背後にはナショナルなものが存在しているという観点は的確な整理だと思う。冒頭に紹介したエピソードにおいても、ベトナムの国語辞典研究者にとってその国最大の国語辞典は国家を体現しているものと認識されていると、本書の観点をあてはめれば彼の驚きも理解できるだろう。

本書の中で、もう少しページを割いて論じてほしかったのは、「規範と記述のあいだ」と題された第二章5節である。ここでは、用例主義・記述主義の立場を貫いたとされる『三省堂国語辞典』編集主幹見坊豪紀の言説と、それに対する規範主義論者の批判が紹介されている。見坊の立場は「規範を意識しつつも使用実態という要素を加味している」のが特徴だとし、現状の言語使用実態をかえりみない規範主義論者の狭量さはさておいて、記述主義論者の立場にたっても採録する語、しない語の選択は当然おこりうるものが指摘されている。単に見坊を用例主義・記述主義の雄と見る従来的一般の見方からは進展しているが、『三省堂国語辞典』が、語の漢字表記の使い分けをかなり徹底しておこない、使い分けに対して書き手の選択の幅を多く認めた『新明解国語辞典』(こちらの編集主幹山田忠雄は規範主義の雄というのが一般的な見方である)とかなり対照的であること、そしてそれは戦後の国語改革への両者のスタンスの違いへとつながりうる問題であることや『三省堂国語辞典』が学習辞典的な性格も標榜していることを第四章の観点とどう結びつけるかなど多くの問題が残されている。安田氏の「外側」からの分析も待たれる問題であるが、筆者なりの「内側」からのアプローチで見坊豪紀論あるいは『三省堂国語辞典』論をいずれ扱ってみたいと思う。

(平凡社 2006年2月1日刊)

雑誌論文から

特別研究員 川上 代里子

センター資料室および大学図書館の新作雑誌に掲載された論文の中から、フィリピンの国家建設の歴史や現状、今後の課題を考える際に参考となる論文を紹介します。

Third World Quarterly, Vol.27, No.1

“The National or the Social? Problems of nation-building in post-World War II Philippines”

Kathleen Weekley

本論文は、合衆国によるフィリピンの国家建設の失敗を検証している。まず著者は、フィリピン国民の国家に対する帰属意識の希薄さと信頼の欠如を指摘し、フィリピンの国民国家としての弱点であると述べる。そしてそれはフィリピンナショナリズムの失敗であるとする。

19世紀スペイン統治下のフィリピンでは、各地で多くの反乱が起こったが、それらは統一性を欠き、またエリートによる独立運動は、自らの地位の安定が下層階級への抑圧の除去よりも優先されたため、国家規模の運動にはなり得なかった。その後の大衆も含めた民族主義の機運は、合衆国に抑圧されることとなった。

合衆国は、植民地政治のなかに現地のエリートを組み込み、統治の安定を図った。フィリピン人の経済エリートによる政治支配と地方分権化により、地域に根ざした利権政治がフィリピン政治の特徴となった。地主の政治力と共産主義的であるというレッテルから、土地制度改革は進まず、農民の蜂起も繰り返された。富の再分配は行われず、大衆の怒りがあっても、フィリピン人エリートと合衆国の経済利益が一致する政策が行われた。フィリピン人エリートというクライアントのパトロンとして、合衆国はフィリピンに対して影響力を持ち続けてきた。マルコス独裁政権の終焉により、形式的に民主制度が再導入されたが、根本的な変化と言えるかどうかが疑わしい。その後経済の

グローバル化や世界情勢の変化に対応し、政府の政策も変化したが、国民の大多数の貧困を改善することにはならなかった。もっとも問題なのは、フィリピン市民は疎外され、社会的問題は放置され制度的改革が行われてこなかったことだろう。その帰結が、国民の政府に対する忠誠心や信頼の欠如であると考えられる。

Asian Affairs, Vol.32, No.4

“Promoting Democracy: Results of Democratization Efforts in the Philippines”

Clifton Sherrill

本論文では、合衆国が行ってきたフィリピンの民主化を検証する。合衆国がフィリピンを植民地化し、最初に制定した法律は、1902年フィリピン組織法 (Organic Act) であった。ここで権利章典や選挙された下院と任命された上院からなる議会、任命された最高裁判所が導入された。厳しい合衆国の支配の下にあったが、合衆国の民主主義をモデルとしたフィリピン政府が設立された。またこの時期に、植民地支配にかかる負担を軽減するため、スペイン支配下ですでに階層化されていたフィリピン人エリートを支配的な地位に任命していった。選挙も実質的には富裕なエリートのものであった。その後1916年ジョーンズ法で、合衆国によってフィリピンの自治独立が約束された。日本占領時代と1946年の独立を経て、戦後も状況は変化せず、戦前と同じエリートによる支配が続いた。戦後の民主主義の再開後、政府の腐敗がフィリピン民主主義の発展を妨げた。1970年代以降マルコス大統領が独裁体制を敷いたが、フィリピン経済を著しく悪化させ、革命により政権は崩壊した。1986年に新憲法が制定され、民主主義が再導入されたが、かつてのエリートが政権に復帰し、抜本的な改革は阻まれた。1992年に大統領となったラモスは、経済発展とともに民主主義の基盤強化にも力を注いだが、アジア経済危機によって挫折を余儀なくされた。

現在、選挙は特定のエリートの間での競争にすぎない。また中央政府は、フィリピン国家内部で法の支配を行使できない地域を抱えている。政党は、理念よりも特定のリーダーのパーソナリティに

頼っている。そして制度的腐敗は、民主政府の正当性に疑問を投げかけ、経済停滞が民主主義の機能を妨げている。フィリピンの民主主義は形式的には整備されているが、人口の大半が貧困に苦しむ社会では、実質的にそれを機能させることは難しい。合衆国の経済改革は、既得権を守ろうとするフィリピン人エリートによって回避され、失敗してきた。現在のフィリピンの民主主義を検討すると、民主化の努力は失敗だったといえる。

Asian Cultural Studies 15 Special issue

“The Struggle of the Muslim People in the Southern Philippines: Independence or Regional Autonomy?”

Temario C. Rivera

本論文は、フィリピン南部ミンダナオ島を拠点とするイスラム勢力の独立闘争について、歴史や現状を簡潔に述べ、問題の解決策を模索している。

ミンダナオ島では、15世紀頃からイスラム教徒が多く到来し、その文化や宗教を普及させ、大きな政治勢力となっていた。そして中央や北部の貿易港を通じて、フィリピンのイスラム化は進行しつつあった。しかし、スペイン、アメリカの植民地化により、ムスリムは政治勢力としては従属的な少数派となっていくた。

第二次大戦後、中央政府の支援によるキリスト教徒のミンダナオ島への移住により、ムスリムの人口に占める割合は低下し、ムスリムの集中する地域の経済的後進性が目立つようになった。一方で高等教育を受けたリーダーがムスリムを組織化し、近年の国際的なムスリムネットワークの拡大により、彼らは中央政府に対し自治独立を要求するようになった。1960年代から70年代にかけて、武装した分離独立運動のための二つの組織、モロ民族解放戦線(MNLF)とモロイスラム解放戦線(MILF)が台頭し始めた。90年代にはアブ サヤフが設立され、テロ活動等でその名を知られるようになった。1970年代から中央政府と和平交渉を行ってきたのはMNLFで、その過程で1990年中央政府はムスリムミンダナオ自治区(ARMM)の発足を認めた。しかし自治権をめぐる政府との交渉中に、MNLFは分裂した。替わってMILFが交渉の主体となるが、いまだ紛争解決には至っていない。

い。主要な問題は、現在 ARMM は他の地方自治体よりも中央政府からの厳しい規制の下にあり、特に予算の配分が限られているため、ムスリムの政治運動勢力から支持を得ることが難しいことである。

Asian Journal of Social Science, Vol.34, No.1

“Culture, Social Science & the Philippine Nation-State”

Raul Pertierra

本論文は、フィリピンにおいて独自の社会科学は可能か、をテーマとしている。そして長い植民地としての歴史から、フィリピンの視点からの社会科学の確立が困難であったことを述べる。しかし、現在すでに国民国家は知識の生産やアイデンティティ形成の主要な場ではなくなっており、これらの活動はパーソナル、ローカル、グローバルな場へと移行している。そのため、フィリピンの社会科学は、均質化された国民国家よりも、市民社会もしくはグローバル社会の豊かな多様性の中で探求されるべきだろう。この場合の社会科学は、人間の解放の追及のためのものであると考えられる。

Pacific Affairs, Vol.78, No.4

“Colonial Capital, Modernist Capital, Global Capital: The Changing Political Symbolism of Urban Space in Metro Manila, the Philippines”

Gavin Shatkin

本論文では、中央政府が国家建設の過程で、首都マニラの都市計画を象徴的に利用してきた歴史を概観し、グローバル時代における首都の機能の変化を述べている。植民地時代、マルコス時代は共に、首都は国家の発展や理想の未来を象徴し、それに貢献した政府の正当性を表すことを意図していた。しかし実際の首都の姿は、社会の貧困や不平等など両者の政策の失敗を露呈する事となった。グローバル時代になると、都市計画は政府の手から民間へと移譲され、都市のあり方は利潤追求を目的として商業化した。そしてグローバル化の過程で拡大した貧富の格差と富裕層の繁栄を象徴するようになった。しかし一方で、都市計画の私企業化は、フィリピンの民主主義の発展に重大な影響をもたらすと考えられる。

プロジェクト活動状況

- 4月24日(月)差別禁止法研究会開催 18:00-21:00
テーマ: 「差別とは何か / 差別はなぜいけないのか」
報告者: 成蹊大学助教授・安部圭介
場所: アジア太平洋研究センター会議室
参加者: 6名
- 4月24日(月)墓田パイロットプロジェクト現地調査のため海外出張(5月8日帰国)
出張者: 成蹊大学専任講師・墓田桂
調査地: コロンボ(スリランカ)
目的: 調査、資料収集のため
- 5月15日(月)差別禁止法研究会開催 17:00-20:00
テーマ: アメリカは何をしてきたか / 障害者差別
報告者: 東京大学日本学術振興会特別研究員・長谷川珠子
場所: 東京大学社研1階ミーティングルーム
参加者: 6名
- 5月27日(土)アート・政治・アジア研究会開催 13:00-20:00
報告者: アーティスト・知花竜海、ミュージシャン・安村摩作、大熊ワタル、写真家・根間智子
場所: 3号館102号室
参加者: 125名
- 6月24日(土)言語のダイナミズム研究会開催 10:30-17:30
場所: アジア太平洋研究センター会議室10号館大会議室
テーマ: 間接疑問と潜伏疑問が共起する構文
報告者: 東京大学大学院・山泉実
テーマ: 形容詞「正しい」の意味分析
報告者: 名古屋大学・李澤熊
テーマ: 定型の前置き表現をめぐる
報告者: 愛知学院大学・多門靖容
テーマ: <距離>と<領域>の語用論
報告者: 麗澤大学・滝浦真人
参加者: 27名
- 6月26日(月)差別禁止法研究会開催 17:30-20:30
場所: 東京大学(本郷)社会科学研究所1階ミーティングルーム
テーマ: 年齢差別が生み出す対立 「頑固な年寄り」と「無知な若造」

報告者: 柳澤武

参加者: 12名

- 6月30日(金)アメリカの表象研究招聘研究者として、カリフォルニア大学バークレー校助教授・Daniel Cuong O'Neil ダニエル チュアン オニールが「アメリカの表象」研究のため来日(7月10日まで滞在)

交流コーナー

- 4月28日(金)センター主催拡大研究会開催 17:00-19:00
演題: 記憶の技術者としての都市遊歩者の東京発見 都市空間と文学とフラヌールとの関係について
講師: ミュンヘン大学教授・エヴリン・シュルツ氏
場所: アジア太平洋研究センター会議室
出席者: 26名
- 5月25日(木)「25周年CAPSを考える集い」
パネラー: 成蹊大学法学部教授・加藤節、成蹊大学経済学部教授・幸村千佳良、成蹊大学法学部教授・富田武
場所: 10号館大会議室
出席者: 28名

研究センター新メンバー

研究助成課担当課長 神田 昭子
特別研究員 小宮山 真美子

CAPS Newsletter 第91号

2006年7月15日発行

(編集発行)

成蹊大学アジア太平洋研究センター

〒180-8633 武蔵野市吉祥寺北町3-3-1

☎ 0422-37-3549 (ダイヤルイン)

FAX 0422-37-3866

E-mail: caps@jim.seikei.ac.jp

ホームページ: <http://www.seikei.ac.jp/university/caps/>